中知床岬灯台。

灯台×旅 ②

北の灯を追って

近代建築の価値を後世に受け継ぐ

取材・文

石丸優希（一般社団法人日本海洋文化総合研究所）

協力

角 幸博（NPO法人歴史的地域資産研究機構）

日本人が建てた灯台は、日本国内にしかないのだろうか。答えは否。その一つとして挙げられるのが、サハリンの灯台群である。サハリン南部の灯台について研究を行った、近代建築史家の角幸博さんに、灯台の地域性や建築としての価値について話を聞いた。

200年以上の長きにわたる鎖国の歴史が幕を閉じ、明治時代、日本は世界に向けて大きく開かれた。文化や技術など、さまざまな要素がヨーロッパからもたらされ、日本の風土や価値観と融合していった時代である。

明治時代につくられた洋式灯台もそのような経緯をたどった。明治初期には、イギリスやフランスから招かれた「お雇い外国人」が設計を担った。やがて時代が進むにつれ、技術や意匠は日本人に引き継がれていった。

こうして築かれた明治から昭和初期（第二次世界大戦以前）の洋式灯台は現存するものも多く、最近ではその価値が再評価されている。その一方で、現状すら不明な灯台も中にはある。その一つがサハリン島に残る灯台たちだ。

サハリンに眠る、日本の記憶

サハリンは、北海道の最北端から約43キロメートルに位置する島である。サハリンのうち、北緯50度以南の地域は、明治38（1905）年から昭和20（1945）年までは、「南樺太（からふと）」と呼ばれ、日本の領土だった。当時この地では、工場や社宅、学校などさまざまな施設が整備され、日本人の手によって町づくりが進められた。灯台もそうして建造された。

サハリン南部には、日本人によって建てられた7基の灯台が現存している。日本人のほとんどが忘れてしまったであろうこれらの灯台に、近代建築という着眼点をもって調査を行った研究者がいる。NPO法人歴史的地域資産研究機構（通称「れきけん」）の代表理事であり、北海道大学名誉教授の角幸博（かどゆきひろ）さんだ。

角さんは長年、近代建築史を研究してきた。その中で、サハリンでかつて建てられた建造物が老朽化しながらも、今なお現地に残っていることに着目。現況をまとめ、北海道とサハリンの建築の関係性を探っている。その調査の過程で、灯台も日本人が整備を行なったものであると知り、調査に乗り出したのだ。

放射能の恐怖と闘う灯台調査

灯台は陸の突端にあることが多い。故に、たどり着くまでが大仕事だ。道なき道を歩いたり、砂浜を延々と歩いたりすることもあったという。

角さんは、現存するサハリン南部の灯台7基のうち6基の現況を調査している。「とくに印象的だったのは、2002年に行った中知床岬（なかしれとこみさき）灯台ですね」と角さんは言う。

中知床岬灯台は「知床」と名がつくが、北海道にはない。サハリン島南端のオホーツク海側に位置している。今も現役の灯台だ。

角さんたちがこの灯台を訪ねたとき、放射能測定器の必要性を指摘された。中知床岬灯台はかつて小型原子炉を使って稼働していたのである。

ロシアでは1970年代ごろから、アクセスが困難でメンテナンスが難しい遠隔地の航路標識（灯台）の電源として、「RTG（放射線同位体熱電気転換基）」を使った小型原子炉を用いていた。RTGを使った小型原子炉は、メンテナンスが不要である上、長期間にわたり安定した電力供給が可能である。一方で、放射能汚染の危険性もある。中知床岬灯台もその一つだった。角さんは、放射能汚染の恐怖に怯えながら、大急ぎで調査を行ったという。

角さんのこうした調査は、多くの人々の支えがあり進められた。灯台の維持管理のために住み込みで働く「灯台守」は、調査期間中に部屋や食事を提供してくれた。また、調査には現地の学芸員が同行した。通訳や運転、調査に必要な手続きや問題の解決などをサポートしてくれたという。

北の灯台の共通点

「サハリンと北海道の灯台には、共通する特徴があることが見えてきました」と角さんは話す。サハリンでは、吏員退息所（りいんたいそくしょ）（灯台守やその家族の宿舎）と灯台を、壁と天井で囲われた渡り廊下がつないでいる。日本国内にある灯台の資料調査により、この形式が、かつての北海道の灯台にも存

在していたことが確認されたのだ。

渡り廊下があると、厳しい寒さでも屋内を通って移動できる。「北国ならではの合理的な工夫です」と角さんは話す。

合理性は、灯台という建造物のキーワードでもある。角さんは、灯台の美しさは機能を極限まで追求した結果ではないかと考察している。すべての灯台は、航路を行く船に確実に光を届けるために、灯室の高さや光の強さなどが入念に計算されている。また、レンズを収める「灯ろう」の屋根形状やハリハン（ガラス窓）など、一つ一つに意匠の美しさが宿る。必然性から導き出された形こそが、灯台の姿として現れるのだ。

灯台の価値を未来へつなぐために

灯台を含め近代建築の多くは、歳月とともに劣化していっている。形あるものはやがて壊れる——。ただし、失われてしまう前に、設計や構造に関するさまざまな情報を記録することで、歴史的価値の継承や保全、研究に活用することができる。角さんによる灯台の調査もその一貫だ。

日本建築学会は、そうした記録をまとめた「歴史的建築総目録データベース」を一般公開している。このようなデータベースにおいては、情報の正確性や、更新体制をどのように担保するかが重要だと言われている。誰がどの情報について責任を持ち、どのように継承していくのか——。こうした仕組みづくりを含め、基盤を整えることが、灯台の価値を未来へつなぎ、新たな研究や活用の可能性を広げる第一歩となるかもしれない。

灯台が照らすもの

角さんがサハリンを訪れて行った調査の記録は、論文を通じて発信され続けている。100 年以上も前に日本人によって建造され、ひそかに現存する灯台たちの“物語”が一人の研究者の手によって確かに紡がれているのだ。

1 | 2
3
4

1/ 母船に乗り灯台へ向かう。2/ 角幸博さん。れきけん事務所にて。　3/ 小型船に乗り換え、灯台へ上陸。　4/ 灯台守家族との食事。ウォッカでもてなされ、交流を深めた。
1,3,4 photo：角 幸 博（NPO 法人歴史的地域資産研究機構）